

# ソグド王離宮を掘る

—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)  
2021年度発掘調査—

村上 智見 北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員  
寺村 裕史 国立民族学博物館准教授  
宇野 隆夫 帝塚山大学客員教授  
ベグマトフ・アリシエル ヘルリン・ブランデンブルグ科学アカデミー研究員  
ベルディムロドフ・アムリディン サマルカンド考古学研究所上席研究員  
ボゴモロフ・ゲンナディー ウズベキスタン科学アカデミー民族考古学研究所上席研究員  
サンディボエフ・アリシエル サマルカンド考古学研究所研究員

## Excavations at Kafir-Kala in Uzbekistan in 2021: The Residential Area (Shahristan) of the Sogdian Royal Residence

MURAKAMI, Tomomi Center for Ainu and Indigenous Studies Hokkaido University, Postdoctoral Fellow  
TERAMURA, Hirofumi National Museum of Ethnology, Associate Professor  
UNO, Takao Tezukayama University, Visiting Professor  
BEGMATOV, Alisher Berlin-Brandenburg Academy of Sciences, Research Associate  
BERDIMURODOV, Amridin Samarkand Institute of Archaeology, Senior Research Fellow  
BOGOMOLOV, Gennadiy Uzbekistan Academy of Science, National Center for Archaeology, Senior Research Fellow  
SANDIBOEV, Alisher Samarkand Institute of Archaeology, Research Fellow

### 1. はじめに

日本・ウズベキスタン共同発掘調査隊は、ソグド人の歴史と文化、およびシルクロード交流の実態解明を目的として、2013年度よりカフィル・カラ遺跡において発掘調査を実施している。2020年度はCovid-19の影響により中止となったが、2021年度は現地隊員によって調査を行うことができた。2019年度までの調査ではシタデルの火災層までの遺構面全体を発掘し、シャフリスタン地区の北寄りに新たな調査区を設定した。本年度はその続きおよび城壁、窯跡の調査を実施した。

### 2. 市街地エリア(シャフリスタン)TrN5の調査

カフィル・カラ遺跡のシャフリスタン地区にトレンチ(TrN5)を設定し発掘を実施した(図2)。カフィル・カラ遺跡シタデルの北側には、東西に左右対称の高まりがあり、その中央にはグルゴム川まで至る南北方向の道が通る。この高まりは何らかの重要な大型複合施設であったと推定している。2019年度は西側の最も高い箇所(西側中央)に、約10×10mのTrN5を

設定し、最も新しい層(推定16～18世紀頃)の調査を中心に、南西部の一角についてはシタデルの火災と同時期とみられる火災層まで掘り下げた。その結果、厚さ約2.1mの壁が検出され、大型の部屋の存在が予想された。

本年度はTrN5を南側に約2.5m拡大した(現トレンチは12.5×10m)。その結果、厚さ最大2.5mの壁が東西南北にそれぞれ検出され、南北9.5m、東西10.15mのほぼ正方形の部屋であることが明らかになった(図3)。壁高は保存状態の良い部分で4mであり、床面から検出された倒壁の状態からみて、本来は6～7mに達したと推定される。部屋の調査からは次の四つの段階が確認された。

- 第一段階(7～8世紀)：床面は炭や灰などで覆われており、シタデルの火災層と同時期のイスラーム勢力による攻撃(712年頃)によって破壊されたと推定された。
- 第二段階(8～9世紀)：火災後に一時的な生活痕が認められたが、これも火災により破壊された。
- 第三段階(10世紀)：壁が部屋の内側に倒され、プラットフォームを作ろうとした痕跡があるが、中断され完成には至らなかった。



図1 カフィル・カラ遺跡 2021年度発掘区



図2 TrN5 調査風景

d) 第四段階(16~18世紀)：遊牧民が居住し、彼らが作った数点の遺物と炉床が確認された。

### 2.1 a) 第一段階(7~8世紀)の調査

壁は縦横 30~33×22~24 cm、厚さ 10~12 cm の、大きめの日干しレンガを用いている。稀に長方形(48×24×10~12 cm)も見られることから、古い時期のレンガも再利用した可能性がある。壁には数層からなる漆喰が塗布されていた。最初に藁を混入させた層を厚めに塗り、その上に水籤した粘土の薄層を重ね、表面は滑らかに仕上げ、壁画が描かれていた。部屋には南寄りの南東部角近くに幅 1.5 m の出入口が設けられていた。また、南壁に沿って幅 1.3 m、高さ 0.4 m のスファが検出された。スファは内壁から 1.3 m の距



図3 TrN5(SfMにより作成した遺構オルソ画像)

離にレンガで輪郭を作り隙間を粘土で埋め、表面には丁寧に漆喰が塗布されていた。スファ南隅からその基部に沿って隣接するように、長さ約 3 m、直径 15 cm の炭化した梁(または柱)が倒れていた。西壁にも幅 1.2 m のスファが部分的に検出された。炭化した梁と柱などの多くは、部屋の南側に集中して倒れていることが分かった。これらの特徴は、アフラシアブヤペン





図4 壁画出土状況

ジケントに見られる迎賓館などを想起させる。

炭化建築材には文様が彫刻されたものも見られたため丁寧に取り上げを行った。保存状態が悪く殆どは判別不能であったが、中には連珠円文内に動物(鳥もしくは天馬?)が配置された断片(60×25 cm)など、ソグド美術でよく知られる文様も確認できた。当該資料は現在、サマルカンド考古学研究所において保存修復が行われている。

壁画は激しく被熱を受け保存状況は良くないが、色や文様が確認できる断片があり、西壁に沿うスファ沿い(主に北側)では、図像が判別できる資料が出土した。色は青または濃青、白、黄、赤などが見られ、青色部分は鳥の形状を成し、アフラシアブの壁画などに描かれた織物文様を想起させる。断片の一部には刀または短剣が確認でき、二つの突起が付いた湾曲した柄は珍しい(図4、5)。今年取り上げられなかった断片も含め、来年度以降の発掘調査ではさらに多くの壁画断片が出土することが予想される。現時点では第一段階の火災層中からの出土遺物は少なく、ほとんどは7~8世紀頃の土器片であるが、特筆すべき遺物として、青色ガラス片の出土は当該地域においては珍しい。

## 2.2 b)第二段階(8~9世紀)の調査

第二段階では一時的な部屋の「再利用の試み」が見られる。床は第一段階の床よりも中央部分で約20~40 cm、西側では更に高くなっており、後世に部屋の床を平坦にする試みがなされたことが窺える。床面の高さに差があるのは、炭化木材などがつぶれ床面が沈んだためと考えられる。西壁沿いには、高さ約23~25 cm、幅約90 cmのスファが検出された。

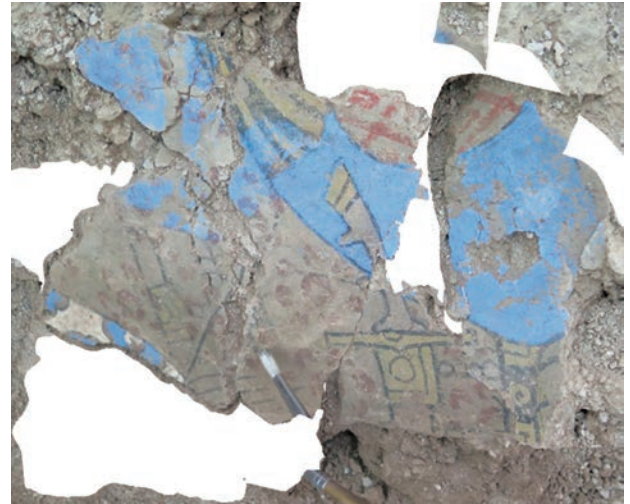


図5 壁画(画像処理後)

部屋の南東角からは、底部が丁寧に取り除かれ逆さに設置された大甕(横48 cm×縦65 cm)が出土した。下部には直径約10 cmの丸い穴が開けられており、さらに下にはレンガが敷かれ、外周は土塊で固められていた。竈として利用されたとみられ、この甕より約2 m北側からは小麦粉の塊が出土した。部屋のほぼ中央では、7~8世紀に属する四つ葉や植物文様のある骨壺(Ossuary)の破片が出土した(図6)。人骨が伴わないことや、この部屋が墓として使用されたとは考えにくいことから、後世に別の場所からもたらされたものと推測している。例えば床などを修復する際に掘削した土に混入していたなどの可能性が考えられる。また、土器片や大量の骨に加えて、ガラス片がこれまでの調査で最も多く出土した。土器片は殆どが8世紀のものであるが、一部に8~9世紀のものが存在する。ガラスは非常に薄く8~9世紀の可能性があり、ゴブレット(図7)やデカンターなどが確認できる。動物(馬?)などの小像も出土した。

## 3. 城壁の調査

本年度は城壁の規模および構造を確認するため、シャフリスタン地区の南東にトレンチ(Tr N6)を設けた。シャフリスタン地区の南側城壁の長さは約233 mであり(図8)、さらに西にはラバド(南側では長さ約122 m)と称される地区が存在する。西側の城壁が途切れる箇所は出入り口の一つであった可能性があり、真っ直ぐ進入することはできない。防御目的で縄張もしくは一種の馬出として計画的に作られたとすると、ラバドもカフィル・カラ遺跡建設の早い段階から存在していた可能性がある。



図6 骨壺

城壁は基礎からの高さ約6m、幅は約24mであることが分かった(図9)。基礎部はパフサブロックと緑・青みがかった灰色の粘土質で作られている。城壁の建設には二つの段階が確認できた。

a) 第一段階(4~5世紀)：初めに築造された第一段階の城壁は高さは約2m、幅約16.8~24mであり、上部は木炭、数点の動物の骨、土器、小さな丸い小石などを含む再生土で構成されていた。壁は北から南に向かって緩やかに立ち上がり、上部には長さ70~85cm、高さ55~60cmの緑青灰色の粘土ブロック、その下に高さ70cm程の湿った緑青灰色の粘土が敷き詰められ、さらに下部は陶器片を含んだレンガと石膏の塊が見られた。要塞的な様相を呈している。後にこの壁の上にやや薄い壁が作られており、内側に兵士が隠れられるようになっていたとみられる。

第二段階(6~8世紀)：城壁の一部は、第一段階上部より約2.75~2.80mの深さまで削り取られていた。この層は雨水などの損傷により薄くなっており、焚き口の痕跡も確認された。そこに濃灰色粘土を突き固めた層が敷かれ、その上に幅92cm、下部の幅97cm、壁高はパフサが残存している部分だけでも約1.50mある防御施設が築かれた。北側(市街地側)には見張りの兵士を配置できる幅2.73mのプラットフォームと通路が設けられていた。また南北の壁に張り出しのような床面が設けられていたが、北側では通路のもう一方の壁が検出されておらず、破壊された可能性がある。ここから出土した日干しレンガの間には接着剤(モルタル)が確認できた。サイズは48×23×10cm、41×25~26×9~10cmであり、乾燥前に表面(平らな面)の片側に手指2~3本による縞模様(直線的なストライプや円弧)の跡が残されていた。



図7 ゴブレット

第二段階の後には、一定期間後に壁の外側に幅約92cmのパフサが補強されたことが確認でき、またその下に別の修繕痕が認められた。残存する幅は67cmである。さらに南側では壁の破壊と崩壊の痕跡が見られた。

第一段階の壁に混入する土器片から、この壁が建設されたのは恐らく4~5世紀頃と推定され、6~8世紀には大規模な修復および増築がなされたと考えられる。しかし、増築の壁は比較的薄く、8世紀初頭にイスラーム勢力から攻撃を受けた際には、投石に耐えきれなかったのではないかと推測される。

#### 4. 窯跡の調査

遺跡の東を流れるイロン・ソイ右岸には、土器などの窯群が存在することが1930年代から知られており、これまでも何度か発掘調査が行われてきた。2021年度はイタリアのボローニャ大学が発掘を実施し、2基の窯跡が確認された。窯は燃焼部と焼成室の2段からなっており、燃焼部分は自然層の上に直接作られていた。窯の形状は円または楕円形であり、直径約2.5~3.5mである。上部はドーム状であったとみられる。土器に加え、ランプ、レンガ、骨壺等が焼成されていた可能性もある。

#### 5. おわりに

本年度も現地調査は難しいと思われたが、現地隊員のおかげで調査を再開することができ、貴重な成果を得ることができた。シャフリスタンに存在した大型部





図8 城壁



図9 城壁の断面図(写真測量)

屋、城壁、窯跡などの重要遺構とともに、図像が鮮明なガラス容器、骨壺など、これまでのカフィル・カラ遺跡シタデルにおける調査では見られなかった種類の貴重な遺物も数多く出土した。今後も遺構・遺物の分析・整理を進め、次年度も TrN5 および城壁を中心に調査を継続したい。

※本研究は JSPS 科研費、JP19H01350、JP19K13397 の助成を受けた成果の一部である。

#### ■参考文献

- ・ Begmatov A. 近刊 Cross cultural exchange across Eurasia as reflected in the sealings from Kafir-kala in Samarkand. *Proceedings of the Second International Congress on Central Asian Archaeology* held at the University of Bern.
- ・ Begmatov A., A. Berdimurodov, G. Bogomolov, T. Murakami, H. Teramura, T. Uno, T. Usami 2020 New discoveries from Kafir-Kala: coins, sealings and wooden carvings. *Acta Asiatica* 119. The Institute of Eastern Culture.
- ・ Berdimurodov A., G. Bogomolov, A. Begmatov, T. Uno 2020 Novye nakhodki bulls gorodišča Kafirkala. *Bulletin of Miho Museum* 20: 53-104.
- ・ 村上智見・寺村裕史・B. ベゲマトフ アリシエル・宇野隆夫・宇佐美智之・B. アムリディン・B. ゲンナディー 2021 「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査 2020 年度までの成果—出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』80-84 頁 日本西アジア考古学会。